

4 成果と課題

(1) 実践事例 1

実践事例 1 は、学校の教育目標、ミッションに照らし合わせ、「思いを表現し、伝えること」と「伝わることの面白さや大切さを感じ取り、豊かな感性とコミュニケーションを育む」ために、「描かれた空を鑑賞し、よさや美しさを自分の言葉で表現しよう。また、友達の意見を大切にしよう。」を目標に掲げて実践された。まず、1 時間目に展開された「鑑賞～空の表情に注目して～」については、友達と意見交換をすることの楽しさを感じながら、多様な表現があることを認め、表現技術の上手・下手だけが美術にとって重要ではないことを実感させることができたことが注目される。反面、国語の力に依拠するものと思われるが、一部生徒の「話す」「書く」等に対する苦手意識を払拭できなかったことが課題としてあげられている。確かに美術は表現するためだけのものではなく、まして表現技術の高さを競うものでもない。現実として、作家よりも美術館へと足を運ぶ人の方が圧倒的にその数が多い。それゆえに、文化的な生活を送る社会を構成する個人としての作品を味わう力が必要とされるのである。今後は、国語科をはじめ、他教科との連携も視野に入れながら、指導の工夫が望まれる。

一方、2 時間目の「あの日の空」では、パステルを画材に、「描く」「こする」「消す」といった 3 つの技法を指導し、生徒自らが工夫してよりよい作品を目指すことができた。完成した作品からは、個々の生徒の経験や思いが映し出されており、それらを相互に鑑賞し、表現者への感情移入や共感といった心の深い部分での自他理解が成されたと思われる。その際、作品をロープに吊るし、空を見上げているような演出をするなどの工夫があったが、少ない鑑賞時間であったため、期待した以上の言語活動が実現できたかどうかはやや疑問が残った。そうした時間構成をどのように配分し、指導の目標を達成していくかが、「表現と鑑賞を一体化した授業」の課題となろう。

(2) 実践事例 2

実践事例 2 は、比較的に多くの学校で取り上げられる題材である。それゆえに、「言語活動の充実」を、どのように展開していくのかの一例を提案できたことは、本研究の目標からも一つの成果といえよう。

内容としては、アンケートによる調査結果の分析からすると、あまり伸び幅はないように見受けられるが、意識的・積極的に生徒は名画鑑賞ができたようである。作品を鑑賞する際、「感じ取る」といった能動的な自己の内側の働きが必要であると思われる。受動的に作品を眺めていても、果たして感動は生まれるのであろうか。本実践のとおり、「何が描かれているのかを懸命に感じ取ろうとすること」が大切である。この働きをばぐくむための題材としての「題名」の創造である。しかもそこへ、「友達と意見を交わし、イメージの連想から様々な思いを次々と浮かび上がらせていく」ことを介在させ、言語活動の充実が図られた。自分なりの意味や価値をつくりだしていく学習を、生徒が相互に楽しみながら活動できれば、コミュニケーションの能力も高まるものと期待される。データとして現れた【資料 5-2】の「Q 8 友達のよいところや工夫したところをみつけて、話すことができましたか。」の結果から、6 割弱の生徒が「できた」と回答している。したがって、残る 4 割強の生徒に対する指導の手立てをどのようにしていくかが、今後の課題となる。すなわち、生徒が相互に話し合うことの方法を、どのように教科の中で指導していくかである。これについては、国語科との連携が必要となろう。

また、「美術が好き」「作品について話し合うことは大切だ」と感じている生徒は多い反面、鑑賞の授業そのものには難色を示す意見が多かったことをも課題として残った。引き続き、「鑑賞の授業」をより魅力あるものにするために、教師が指導スキルを向上し、生徒が意欲的に学習できるような指導内容の工夫や学習環境の整備が望まれる。